

# 初期近代英語における接続法

## —Tyndale 訳聖書をめぐって

浦田 和幸

(東京外国語大学外国語学部助教授)

### 1. はじめに

小論では初期近代英語期(1500–1700)における接続法(subjunctive)の用法を調査する一環として、特に初期近代英語の最初期である16世紀前半について、その実態を記述することにする。資料としては、William Tyndale(?1494–1536)によって翻訳された英語聖書を用いる。Tyndaleの生涯についてはDaniell(1994)に詳しいが、宗教改革の時代に聖書の英訳を志し、イギリスを逃れてドイツで幾多の困難を経て新約聖書の翻訳を完了し、ギリシア語原典からの英訳聖書が1525年から1526年にかけて印刷された。その後、ヘブライ語原典からの旧約聖書の翻訳に努め、1530年には旧約聖書の最初の「五書」(Pentateuch)の英訳が出版され、また、1534年には新約聖書の英訳の改訂版が出版された。Tyndaleは1536年8月に異端の判決を受けて聖職位を剥奪され、10月に絞首刑の後に火刑に処せられた。

各年代の英訳聖書は、英語史研究の資料としてしばしば用いられる。それらは原典からあるいはラテン語訳からの翻訳文献であり、かつ、宗教のテキストであるため、必ずしも日常の自然な言葉遣いを反映しているとは言えないが、その点に気をつければ、英語における文法や語彙の変遷をたどるうえで非常に貴重な文献である。

英語史研究の中で初期近代英語期の英訳聖書を対象とする場合、英語散文の金字塔と呼ばれる1611年刊の『欽定訳』(The Authorised [King James] Version of the Bible)に拠るのが普通であるが、小論では初期近代英語の最初期(16世紀前半)における用法を調査することを目的としているため、Tyndale訳の新約聖書を資料として用いる。また、下に挙げたDaniell(1994, p. 1)からの引用で述べられているように、1611年刊の欽定訳のかかなりの部分はTyndale訳を踏襲しているため、英語史的観点からは、欽定訳よりもむしろTyndale訳のほうが、語学的資料として適切ではないかと考えられる。

William Tyndale gave us our English Bible. The sages assembled by King James to prepare the Authorised Version of 1611, so often praised for unlikely corporate inspiration, took over Tyndale's work. Nine-tenths of the Authorised Version's New Testament is Tyndale's. The same is true of the first half of the Old Testament, which is as far as he was able to get before he was executed outside Brussels in 1536.

## 2. 接続法の変遷

英語における接続法は、古英語以降衰退の一途をたどり、現代英語では概ね以下の用法に限られる。形態上から明らかに接続法と判断できる例を挙げる。(Cf. Quirk et al. (1985, pp. 156-158))

### A. 接続法現在 (present subjunctive)

- (1) 命令的接続法 (mandative subjunctive) : e.g. “They recommend that this tax *be* abolished.”
- (2) 定型的接続法 (formulaic subjunctive) : e.g. “God *save* the Queen!”
- (3) 条件・譲歩節 : e.g. “(Even) *if* that *be* the official view, it cannot be accepted.”
- (4) 否定目的節 : e.g. “The President must reject this proposal, *lest* it *cause* strife and violence.”

### B. 接続法過去 (past subjunctive)

*were* の場合 : e.g. *If I were* rich, I would buy you anything you wanted.

英語史の流れの中で接続法の変遷を大きくとらえれば、接続法は次第に「有標性」(markedness)を増してきたとすることができるだろう。しかし、命令・提案・勧告などを表す動詞・形容詞・名詞に続く *that*-節内で用いられる「命令的接続法」については、20世紀以降増加傾向にあり、特にアメリカ英語では、この場合には接続法現在形を用いるのが「無標」(unmarked)であり、*should*を用いた表現は「有標」(marked)と言える。また、命令的接続法はイギリス英語でも最近では増加傾向にあり、現代英語において進行中の文法変化を研究するうえでも興味深いテーマである。(この方面でのまとまった研究としては Övergaard (1995) を参照。)

初期近代英語における接続法の概略については、Barber (1997, pp. 171-173) や Rissanen (1999, pp. 227-231, 285-286, 304-305, 307-315) を参照。最近の研究では、初期近代英語期の英文法書の見解を検証した Dons (2004) が、接続法を含めて法 (mood) 全般に関して、当時の文法家のとらえ方を実証的に論じている。また、González-Álvarez (2003) では、条件節の法に関して、初期近代英語から後期近代英語にかけて起きた変化を、ジェンダーとの関連で論じている。一方、古英語から現代英語に至る接続法の通史的研究としては、Harsh (1968) が今日でももっとも包括的な研究の一つと言えるだろう。同書では、資料の一部として、古英語から現代英語までの 6 種の英訳聖書に拠って、「マタイによる福音書」の 7 章から 14 章を分析し、通時的に比較している。また、『欽定訳』における接続法の用法については、寺澤ほか (1969, pp. 128-134) に詳しい解説がある。最近では、『欽定訳』の「マタイによる福音書」のテキストに極めて詳細な注釈を施した苅部ほか (2002) に、巻末の文法の一環として接続法の用法に関する簡明な記述があり、現代英語版聖書の *The Revised English Bible* (1989) の状況と対比されている。

さて、初期近代英語の最初期の接続法を記述することを目的とする小論では、1526 年刊の Tyndale 訳聖書より「マタイによる福音書」(The Gospel according to S. Matthew) を資料として選び、用例を仔細に検討する。使用したテキストは、先頃、大英図書館から刊行さ

れた版であり、1526年刊の「ウォルムス版」(Worms edition)に基づく原綴り版(Original Spelling Edition)である。(以下、「マタイによる福音書」は「マタイ」と略記。また、引用の際には Matt. と略記。)

ここで、本論に入る前に、聖書のある箇所をサンプルとして選び、古英語期から現代に至る各種英訳聖書で当該箇所の用法の変遷をたどってみたいと思う。かつての英語では、副詞節内で接続法を用いることがよくあったが、その一例として、「…する前に」を意味する before-節の場合を概観してみよう。

新約聖書の「マタイ」から、イエスがペトロの否認を予言する有名な箇所を引用する。「イエスは言われた。『はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。』』という一節(26章34節)にあたる英語の箇所を、CD-ROM版の *The Bible in English* に収録された年代順の21種の英訳聖書より挙げる。‘before’ (もしくは相当語) を下線で示し、「鳴く」にあたる動詞をイタリック体で示す。古英語期、中英語期、ルネサンス期、18-19世紀、20世紀の順に見ていきたい。

### 【古英語期 OLD ENGLISH】

#### <West Saxon I (Gospels), c. 990>

- (1) Ða cwæð se hælend soð ic segge þe. þæt on þissere nihte ær þam þe cocc *crowe* þriwa þu wið-sæcst min. (“Then said the Saviour, truly I tell thee that (in) this night before (a) cock *crow* thrice thou denyest me thrice.”)

#### <West Saxon II (Gospels), c. 1175>

- (2) Ða cwæð se hælend Soð ic segge þe. þæt on þissere nihte ær þam þe cocc *crowe*. þreowe þu wið-sæcst min. (“Then said the Saviour, Truly I tell thee that (in) this night before (a) cock *crow* thrice thou denyest me.”)

古英語期の英訳聖書では、ær þam þe (= before) で導かれる節の中で、「鳴く」を意味する動詞 (crawan (= crow)) の接続法現在形 *crowe* が用いられている。(直説法3人称単数現在ならば、*crawð* (= croweth) のようになるところ。)

### 【中英語期 MIDDLE ENGLISH】

#### <John Wycliffe (Early), c. 1384>

- (3) Jhesus seith to hym, Trewly I seie to thee, for in this ni3t bifore the cok *crowe*, thries thou shalt denye me.

#### <John Wycliffe (Late), c. 1395>

- (4) Jhesus seide to him, Treuli Y seie to thee, for in this ny3t bifor the cok *crowe*, thries thou schalt denye me.

中英語期のウィクリフ派訳聖書では、接続詞として before が用いられ、節内では *crowe* という接続法現在形が用いられている。

【ルネサンス期 RENAISSANCE】

<William Tyndale (Pentateuch, Jonah & New Testament), 1530-34>

- (5) Iesus sayde vnto him. Verely I saye vnto ye [= thee] / that this same night before the cocke *crowe* thou shalt denye me thryse.

<Miles Coverdale, 1535>

- (6) Iesus sayde vnto hī: Verely I saye vnto ye [= thee] : This same night before ye [= the] cock *crowe*, shalt thou denie me thryse.

<Great Bible, 1540>

- (7) Iesus sayd vnto him: Uerely, I saye vnto the [= thee], that in this same might [*sic*], before the cocke *crowe*, thou shalt denye me thryse.

<Thomas Matthew, 1549>

- (8) Iesus sayde vnto hym: Verelye I saye vnto the [= thee] yt [= that] thys same nyghte before the cocke *crowe* thou shalte denye me thryse.

<Bishop's Bible, 1568>

- (9) Iesus sayde vnto hym: Ueryly I say vnto thee, that in this same nyght, before the Cocke *crowe*, thou shalt denie me thryse.

<Rheims Douai, 1582-1610>

- (10) Iesvs said to him, Amen I say to thee, that in this night before the cocke *crowv*, thou shalt denie me thrise.

<Geneva Bible, 1587>

- (11) Iesus sayde vnto him, Verely I say vnto thee, that this night, before the cocke *crow*, thou shalt denie me thrise.

<King James Bible, 1611>

- (12) Iesus said vnto him, Uerily I say vnto thee, that this might [*sic*] before the cocke *crow*, thou shalt denie me thrise.

16世紀前半のTyndale訳から17世紀初頭のKing James Bible(=The Authorised Version, 欽定訳)に至るまで、*crowe* もしくは *crow* という接続法現在形が用いられている。(ついでながら、上記の引用箇所では、欽定訳の表現はTyndale訳の表現と近似していることが確認できる。)

【18-19世紀】

<Daniel Mace (New Testament), 1729>

- (13) Iesus replied, I tell you for certain, that this night before the time of cock-crowing, thou shalt abjure me thrice.

<Richard Challoner, 1750-52>

- (14) Iesus said to him: Amen I say to thee, that in this night before the cock *crow*, thou wilt deny me thrice.

<John Wesley (New Testament), 1755>

(15) Jesus said to him, Verily I say to thee, before cock-crowing thou wilt deny me thrice.

<John Worsley (New Testament), 1770>

(16) Jesus said unto him, Verily I tell thee that this night, before the cock *crow*, thou wilt deny me thrice.

<Noah Webster, 1833>

(17) Jesus said to him, Verily I say to thee, that this night, before the cock *shall crow*, thou wilt deny me thrice.

<Leicester Ambrose Sawyer, 1858>

(18) Jesus said to him, I tell you truly, that this night, before the cock *crow*s, you will deny me thrice.

18－19 世紀の翻訳になると、従来とは傾向が異なる。18 世紀に関して見ると、Richard Challoner (1750-52) と John Worsley (1770) では依然として接続法現在形 (*crow*) が用いられているが、Daniel Mace (1729) と John Wesley (1755) では動詞の法の区別を避けるかのように、“before the time of cock-crowing” もしくは “before cock-crowing” という具合に句の形で表現している。一方、19 世紀になると、聖書の英語といえども before-節での接続法は古く感じられたのか、接続法現在形を避けて、Noah Webster (1833) では *shall* を用い “before the cock *shall crow*” とし、Leicester Ambrose Sawyer (1858) では直説法現在形の *crow*s を用い “before the cock *crow*s” とし表現している。CD-ROM 版の *The Bible in English* に収録された 21 種の英訳聖書に関する限り、「マタイ」の当該箇所 (26 章 34 節) の翻訳において、before-節中で接続法現在形を用いた例は Leicester Ambrose Sawyer (1858) が最初である。

【20 世紀】

<Twentieth Century New Testament (New Testament), 1904>

(19) “I tell you,” replied Jesus, “that this very night, before the cock *crow*s, you will disown me three times!”

<New English Bible, 1970>

(20) Jesus said to him, ‘I tell you, tonight before the cock *crow*s you will disown me three times.’

<Good News Bible, 1976>

(21) Jesus said to Peter, “I tell you that before the rooster *crow*s tonight, you will say three times that you do not know me.”

20 世紀の英訳聖書では、もはや before-節中での接続法現在形の使用は見られない。

比較のために、他のゲルマン語の例として、ドイツ語における通時的状況を簡単に見てみよう。古期ドイツ語 (Althochdeutsch, Old High German, 750－1050/1100) を扱う高橋 (1994)

では、「…する前に」という意味の従属接続詞 *er* の節内で接続法が用いられた例として、以下の文が挙げられている (p. 171)。(ちなみに、古期ドイツ語の *er* は、古英語の *ær* (=formerly, before) と同根である。Cf. 近代英語の *ere*, および、現代英語 *early* の冒頭の *ear-*の部分。)

*thu lougnis min zi ware, er hinaht hano krahe* (O. (オットフリートの聖福音集) IV, 13, 35)  
「汝は真に、今夜雄鶏が鳴く前に、我を否認する」

初期新高ドイツ語 (Frühneuhochdeutsch, Early New High German, 1300–1650) を扱う工藤・藤代 (1992) では、中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch) から新高ドイツ語 (Neuhochdeutsch) にかけての接続法の用法の変遷に関して、「Mhd. から Nhd. にかけて接続法が後退していった領域として、目的文、主語文、比較文 (比較級のあとの *als* 文)、*bis* 文、*ehe* 文があげられる。このうち *ehe* 文は、比較的早い時期に直説法を受け入れている。」(pp. 120-121) と述べている。「…する前に」を意味する *ehe*-節では比較的早い時期に直説法を受け入れているという記述は、ドイツ語と英語における状況を比較する点で注目に値する。英語の Tyndale 訳とほぼ同時期のドイツ語の Luther 訳から、「マタイ」の 26 章 34 節を見てみよう。1534 年版の Luther 訳聖書から引用する。

*Jhesus sprach zu jm / Warlich ich sage dir / jnn dieser nacht / ehe der hane krehet / wirstu mein drey mal verleugnen.* (“Jesus said to him, Truly I say to thee, (in) this night before the cock crows, thou shalt deny me thrice.”)

ここでは、「…する前に」を意味する *ehe*-節内で、*krehet* (= crows) という直説法現在形が用いられている。すぐ上で引用した古高ドイツ語の類例では *krahe* という接続法現在形が用いられていた点と比較されたい。一方、既に見たように、Luther 訳と同時代の英語の Tyndale 訳 (1530-34) では *crow* という接続法現在形が用いられていることを思い起こすと、「…する前に」という意味を表す節での接続法の使用に関しては、上記の引用箇所を見る限り、英語のほうがドイツ語よりも保守的であったことが分かる。一般に、英語とドイツ語の文法を比べた場合、ドイツ語のほうが英語より保守的であり、とりわけ接続法現在形 (ドイツ語文法の接続法第 1 式) の現状に関しては、(ドイツ語でも減ってきているとはいえ) 英語に比べればはるかに保守的であると言えよう。このことより、Luther 訳と Tyndale 訳における「マタイ」(26 章 34 節) の状況は予想に反して意外であり、興味深く思われる。

### 3. Tyndale 訳聖書 (1526) における接続法の用法

以下、Tyndale 訳の「マタイ」を資料として、接続法の用法に関して調査した結果を示す。テキストは 1526 年版の Tyndale 訳を用いた。なお、同書では章 (chapter) の小分けの節 (verse) の番号が表示されていないので、以下の引用では、*Matt.* という略語のあとに章の番号だ

けを示す。なお、Tyndale 訳以外の英訳聖書からの引用の際には、出典を明記することとする。Tyndale 訳 (1526) の場合には省略する。

さて、Tyndale 訳の「マタイ」の中で、形態上から接続法と判別できる例は、接続法過去形が 4 例、接続法現在形が 103 例である。まず、接続法過去形について簡単に触れることにしよう。形態上から明らかに接続法過去形と判断できるのは、単数主語と共起する *were* の場合だけであり、以下の (22) (23) の用例中に見る 4 例 (イタリック体で表示) が観察された。

#### 【接続法過去】

(22) But whosoever offend won [= one] of these lytell wons [= ones], which beleve in me: yt *were* better for hym, that a millstone *were* hanged aboute his necke, and that he *were* drowned in the depth of the see. (Matt. 18)

(23) So greatly that yff it *were* possible, even the chosen shuld be brought into erreure. (Matt. 24)

英語史的な観点から注意すべき点は、(22) の “yt *were* better for hym . . .” という表現の *were* である。この *were* は主節に現れ、条件文の帰結節 (apodosis) でもよく用いられた。現代英語ならば “it would be . . .” とするところであるが、この用法の *were* はいつ頃まで見られたのであろうか。次の例で示すように、『欽定訳』の同箇所でも “it *were* better for him . . .” という表現が用いられている。

(24) But who so shal offend one of these little ones which beleuee in me, it *were* better for him that a milstone *were* hanged about his necke, and that he *were* drowned in the depth of the sea. (King James Bible 1611: Matt. 18.6)

CD-ROM 版の *The Bible in English* に収められた 21 種の英訳聖書で年代順に調べたところ、Noah Webster (1833) までは “it *were* . . .” が用いられ、Leicester Ambrose Sawyer (1858) 以降の版では “it would be . . .” が用いられている。

(25) but whoever offends one of these little ones that believe in me, it *would be* better for him that a millstone should be hung to his neck, and that he should be plunged into the depths of the sea. (Leicester Ambrose Sawyer 1858: Matt. 18.6)

以上の例から判断すると、英訳聖書では、主節 (あるいは帰結節) において “it *were* . . .” から “it would be . . .” への移行が見られる境目は、19 世紀半ば頃のようなのである。(この点についてはさらに調査を要するが、接続法現在を主として扱う小論では深く立ち入らないことにする。)

これより、接続法現在形について見ていく。103 例の接続法現在形のうち、Be 動詞が 52

例あり、全体のほぼ半数を占めている。(ただし、‘be’ という語形は、不定形や接続法現在形として用いられるほかに、初期近代英語期には、複数主語に呼応する直説法現在形として用いられることもあった。e.g. “Soo the laste shalbe [= shall be] fyrste, and the fyrste shalbe laste. For many are called, and feawe *be* chosen.” (Matt. 20) この例に見るように、直説法現在形の ‘are’ と ‘be’ が、対比的な表現の中で並んで用いられる場合がある。直説法現在形としての ‘be’ は、Tyndale 訳「マタイ」で 10 例観察された。)

以下、Be 動詞と一般動詞の接続法現在形の例をそれぞれ挙げておく。

【接続法現在形】

<Be 動詞の例>

(26) Then came untyll hym the tempter, and sayde: yff thou *be* the sonne [=son] of god, commande that these stones *be* made bred [=bread]. (Matt. 4)

<一般動詞の例>

(27) Then the devyles besought him sayinge: if thou *cast* us out, suffre us to go oure waye into the heerd of swyne. (Matt. 8)

(28) Wherefore yf thy right eye *offende* the [=thee], plucke hym out and caste him from the [=thee]. (Matt. 5).

一般動詞の例では、(27) は主語である 2 人称単数代名詞の *thou* が ‘cast’ という動詞形を、(28) は単数名詞の *thy right eye* が ‘offende’ という動詞形を従えている点に留意したい。ともに接続法現在形である。仮に直接法現在形であれば、それぞれに直説法の語尾がつき、2 人称単数で *castest*、3 人称単数で *offendeth* となるところである。

また、収集された 103 例を統語的環境に応じて分類し、主節と従属節の生起数を示したのが下の表である。従属節については、名詞節と副詞節の生起数を示しておく。(形容詞節での接続法現在形の使用はなかった。)

主節	従属節	計
24	79 (名詞節 17) (副詞節 62)	103

接続法現在形の生起数は、従属節が主節の 3 倍強、また、従属節に関しては、副詞節が名詞節の 3.5 倍強である。これは、現代英語とは異なる傾向を示している。

現代英語（特にアメリカ英語）では、接続法現在形が用いられるのは主に「命令的接続法」の場合であり、従って、名詞節での使用がもっとも多いと言える。他方、副詞節で接続法現在形が（アメリカ英語で）ほぼ規則的に用いられるのは *lest* の場合に限られ、しかも *lest*-節の出現率自体が低いことを考慮に入れると、現代英語では、副詞節中に接続法現在形が現れる例は少ないと言える。また、現代英語では、主節での直説法現在形はほぼ定型

的表現に限られるので、(文体にもよるが、) 生起する率は一般に極めて低い。ところが、初期近代英語の Tyndale 訳では、接続法現在形の総計 103 例のうち、主節での生起例 (24 例) が 4 分の 1 弱を占めており、聖書の英語であるという要素を考慮しても、現代英語の実態と比べてかなり多いという印象を受ける。

以下、主節、名詞節、副詞節の順に、Tyndale 訳の「マタイ」における接続法現在の用法を見ていく。

### 3.1. 主節 (24 例)

願望を表す文である。24 例中、Be 動詞が 21 例、一般動詞が 3 例ある。Be 動詞の例に関しては、“Wo be unto . . .” (…に災いあれ) という表現が 13 例あり、Be 動詞の例の過半数を占めている。以下、Be 動詞の代表的な例を 2 例挙げ、一般動詞については生起例を 3 例とも挙げておく。

(29) O our father, which arte in heven, halowed *be* thy name. (Matt. 6)

(30) Wo [=Woe] *be* unto the world because of evill occasions. (Matt. 18)

(31) In the mornynge as he returned into the cite ageyne, he hungred, and spyed a fygge tree in the waye, and cam to it, and founde nothinge there on, but leves only, and said to it, never frute *growe* on the [= thee] hence forwardes. (Matt. 21)

(32) Then answered all the people, and sayde: his bloud [=blood] *fall* on us, and on our children. (Matt. 27)

(33) God *spede* [= speed] you. (Matt. 28)

### 3.2. 名詞節 (17 例)

命令・要求・勧告などを表す動詞・形容詞のあとの that-節内で用いられる「命令的接続法」(mandative subjunctive) の例がもっとも多く、他には “if it happen that . . .” の that-節内、接続詞 whether-節内での例が見られた。内訳は以下のとおり。

命令的接続法

動詞が従える節 : command (2), bid (2), charge (1), pray (1), see (4), take heed (1)

形容詞が従える節 : better (2), necessary (1), enough (1)

その他 : happen (1); whether (1)

以下に、それぞれ 1 例ずつ挙げる。

(34) Syr, we remember, that this deceyver sayde whyll he was yet alyve, After thre days y [=I] wyll aryse agayne, commande therfore that the sepulcre *be* made sure untyll the thyrdaye . . . (Matt. 27)

(35) Master, Moses bade, if a man dye havinge no chyldren, that the brother *Mary* [= marry] his wyfe, and *reyse* uppe seed unto his brother. (Matt. 22)

- (36) I charge the [= thee] in the name off [= of] the lyvinge god, that thou *tell* us whether thou be christ the sonne of god. (Matt. 26)
- (37) Butt praye that youre flyght *be* not in the winther, nether on the saboth [= Sabbath] daye. (Matt. 24)
- (38) Se that youre light so *shyne* before men, that they maye se youre good workes, and glorify youre father which is in heven. (Matt. 5)
- (39) and Jesus answered, and sayde unto them: Take hede, that no man *desceave* [= deceive] you . . . (Matt. 24)
- (40) Better hit is for the [= thee] that one of thy membres *perisse* then [= than] that thy whole body shuld be caste intho [= into] hell. (Matt. 5)
- (41) Hit is necessary that evyll occasions *be* geven, neverthesse woo be to that man, by whom evyll occasion commeth. (Matt. 18)
- (42) It is ynough [= enough] for the disciple to be as hys master ys, and that the sevante *be* as his lorde ys. (Matt. 10)
- (43) if it happen that he *fynd* him, verly I say unto you . . . (Matt. 18)
- (44) I charge the [= thee] in the name off [= of] the lyvinge god, that thou tell us whether thou *be* christ the sonne of god. (Matt. 26)

Tyndale 訳「マタイ」の中では、command, bid, necessary, enough, happen, whether が直説法や法助動詞を従える例は見られず、接続法現在形を従える例のみであった。better については、接続法現在形を従える 2 例に加えて、“yt were better for hym that a millstone *were* hanged aboute his necke, and that he *were* drowned in the depth of the see.” (Matt. 18) のように、that-節内で接続法過去形の *were* が用いられる例が 1 例あった。この場合には、主節の *yt were better* 自体が接続法過去であることが、that-節内での *were* の生起に影響を与えていると考えられる。

一方、charge, pray, see, take heed に関しては、接続法現在形以外の例も見られる。その分布は以下のとおりである。なお、動詞形を示す略語と例を先に示しておく。

Sbj (= Subjunctive)	接続法 (e.g. thou <i>go</i> ; he <i>go</i> )
Ind (= Indicative)	直説法 (e.g. thou <i>goest</i> ; he <i>goeth</i> )
Sbj/Ind	接続法と直説法の区別ができない場合 (e.g. I <i>go</i> ; they <i>go</i> )
Modal (= Modal auxiliary)	法助動詞 (e.g. he <i>maye go</i> ; ye <i>shuld go</i> )

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal	
charge	1	0	0	2	( <i>should</i> 2)
pray	1	1	0	0	
see	2	5	0	0	
take heed	1	1	0	0	

これらの4動詞に関しては、明らかに直接法を伴うと判断できる例は見当たらず、また、法助動詞 (should) の例は charge の場合だけである。charge が法助動詞 (should) を伴う例では、次に示すように、文全体の時制が過去である。

- (45) When Jusus knewe that, he departed thence, and moche people folowed him, and he healed them all. and charged them, that they *shulde* not make him knowen . . . (Matt. 12)
- (46) Then he charged his disciples, that they *shulde* tell no man, that he was Jesus Christ. (Matt. 16)

charge が接続法現在形を伴う例として先に挙げた (36) では、主文の動詞 charge の時制は現在であった。(45) と (46) では、主文の動詞が過去形の charged であるため、それに続く節内では接続法現在形を用いるよりも、過去形の助動詞 should を用いるほうがより自然だと感じられたのかもしれない。一方、pray, see, take heed については、直説法と断定できる例も法助動詞を伴う例も見あたらなかったが、これら3動詞は、(37) – (39) で例示したように、すべて命令文中に起こる例である。命令文中では、「未現実」を表す接続法現在形が生起しやすかったのではないかと考えられる。名詞節に接続法現在が現れる17例すべてについて主文の動詞を調べてみると、(35)に示すとおり、bid の過去形の bade が導く that-節内に接続法現在が生起する例もあるが、他の例においては主文の動詞が過去時制の文はなく、命令文か、あるいは、現在時制の平叙文ばかりである。(実は、(35)の bade の例についても、過去時制の bade が that-節を従えているというよりも、むしろ、if 以下の節全体が直接話法的に現在時制で表現されていると考えることもできよう。)

やはり、that-節を導く主動詞が過去時制であるか否かということが、接続法現在形の使用の如何に影響していたと言えよう。「非過去」の場合に、接続法現在形は起きやすいと考えられる。(この点については、今後、Tyndale 訳聖書全体の中で資料の幅を広げ、また、それ以前の古英語訳および中英語訳聖書とも綿密に比較して、共時的かつ通時的に検討したいと思う。)

### 3.3. 副詞節 (62例)

接続法現在形は、条件を表す if, and if (= if), and (= if), except (= unless) の節、目的を表す that, lest の節、時を表す before, till の節、譲歩を表す whosoever-節で例が見られた。内訳は以下のとおり。

条件節 : if(30), and if(2), and(1); except(5)

目的節 : that(2); lest(6),

時間節 : before(3); till(8)

譲歩節 : whosoever(5)

以下に、それぞれ1例ずつ挙げる。

- (47) If thou *be* the sonne of God, come doune from the crosse. (Matt. 27)
- (48) But and if thynne eye *be* wycked, then is all thy body full of dercknes. (Matt. 6)
- (49) Peter answered, and sayde: master, and thou *be* he, bidde me come unto the [= thee] on the water. (Matt. 14)
- (50) For I say unto you, except youre rightewesnes [= righteousness] *excede*, the rightewesnes off [= of] the scribes and pharises, ye cannot entre into the kyngdome off heven. (Matt. 5)
- (51) But thou, when thou fastest, annoynte thynne heed, and washe thy face, that it *appere* nott unto men howe that thou fastest. (Matt. 6)
- (52) Agre [= agree] with thynne adversary at once, whyles thou arte in the vaye [=way] with hym, lest thynne adversary *delyvre* the [= thee] to the iudge, and the iudge *delivre* the to the misnister, and then thou *be* cast into preson. (Matt. 5)
- (53) art thou come hyther to torment us before the tyme *be* come? (Matt. 8)
- (54) I tell you for a treuth [= truth], ye shal not fynysse all the cities of israhel, tyll the sonne of man *be* come. (Matt. 10)
- (55) whosoever *swear* by the temple, yt ys nothings: but whosoever *swear* by the golde of the temple, he is detter [= debtor] (Matt. 23)

「もし…ならば」を意味する条件節では、ifと並んでandやand ifも用いられるが、大半はifで表現されている。if-節における接続法現在形は30例あり、これだけで、Tyndale訳「マタイ」に生起する接続法現在形の全体(103例)の約3割を占めている。

if-節中の30例の接続法現在形は、いずれも現在時制(現在完了も含む)の平叙文か、命令文中、つまり非過去の環境に現れるものばかりである。Tyndale訳の「マタイ」全体の中で、非過去の環境に生起するif-節の述語動詞は計65例あるが、そのうちの46%にあたる30例が接続法現在形をとっていることになる。以下に、動詞形の内訳を示す。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal	
if	30	7	0	28	(will 12, shall 11, should 2 can 2, may 1)

直接法と断定できる例が皆無であることは注目に値する。この点、現代英語とは対照的である。法助動詞を用いた例は接続法現在の例とほぼ同数である。

if-節で接続法現在形が用いられた場合は、不確実性や疑いの気持ちを表現することができる。上に挙げた例文(47)の“If thou *be* the sonne of God, come doune from the crosse.”は、十字架につけられたイエスに対して、通りかかった人々が「神の子なら、十字架から降りて来い」とののしっている場面であり、「神の子」という主張に対する軽蔑や疑いの気持ちが接続法現在形を用いることによって示されている。接続法現在形を用いた場合、程度の差はあれ、不確実性の意味合いが出てくることは確かと言えよう。しかし、接続法現在形と法助動詞が同一の文脈の中で交替して用いられている場合もある。下の(56)ではshall

と接続法現在形が並列している。

- (56) For yf ye *shall* love them, which love you: what rewarde shall ye have? Doo not the publicans even so? And if ye *be* frendly to youre brethren onli: what singuler thyng doo ye? Doo nott the publicans lykewyse? (Matt. 5)

次に、「もし…でなければ」(= *unless*) の意味で用いられた接続詞の *except* について見ておこう。過去時制の中に生じた *except* の例は 1 例あり、*should* が用いられている。他は現在時制の中に起こる例であり、その 7 例の動詞形は以下の分布を示している。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal
<i>except</i>	5	2	0	0

明らかに直説法と判断できる例や法助動詞の例はない。「もし…でなければ」の意味の *except* の場合、現在時制では接続法現在形が普通であったと言えよう。

目的を表す *that*-節内の述語動詞の生起数は 16 例あるが、そのうち過去時制で用いられたものが 3 例あり、*that*-節内では法助動詞 (*might* 2, *should* 1) が用いられている。一方、非過去の環境に現れた 13 例の *that*-節では、以下の分布を示している。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal
<i>that</i>	2	0	0	11 ( <i>may</i> 8, <i>shall</i> 2, <i>might</i> 1)

目的を表す *that*-節では法助動詞を用いるのが普通であり、接続法現在を用いることは少なかった。しかも、接続法現在形が用いられた例は、上の例文 (51) の “*that it appere nott unto men . . .*” のように、2 例とも否定目的を表す文であり、次に触れる *lest* で置き換え可能な構文の例であった。一方、法助動詞が用いられた用例はすべて、「…するために」という肯定目的を表すものであった。

否定目的の *lest*-節の述語動詞は計 13 例あり、それらはすべて非過去の環境で用いられた例である。動詞形の内訳は次のとおり。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal
<i>lest</i>	6	5	0	2 ( <i>should</i> 2)

直説法と断定できる例はない。非過去の文脈の *lest*-節では、接続法現在を用いるのが普通であったと考えられる。しかし、*should* を用いた例も 2 例あるが、接続法現在を用いた文との間に意味的に大きな違いがあるようには感じられない。*should* の例を 1 例挙げておく。

- (57) Then sayd Jesus unto hym agane: Then are the chyl dren fre [=free]. Neverthelesse, lest

we *shulde* offende them: goo to the see and cast in thyne angle, and take the fysshe that fyrst cometh up. (Matt. 17)

時間表現として、「…する前に」という未現実の事柄について述べる *before*-節では、既に第2節で歴代の英訳聖書によって確認したように接続法現在形が可能であった。Tyndale 訳「マタイ」では *before*-節の例は4例見られ、いずれも非過去の環境で用いられたものである。動詞形の内訳は以下のとおり。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal
<i>before</i>	3	1	0	0

非過去では、直説法と断定される例はなく、また、法助動詞を用いた例も見られなかった。

「…するまで」という未現実の事柄について述べる *till*-節については、述語動詞が過去時制のものが3例あり、うち1例では直説法過去形が、2例では *should* が用いられている。また、1例だけ見られる *until*-節は、過去時制の環境に現れるものであり、述語動詞は直接法過去形である。一方、非過去の環境に現れる *till*-節は14例あり、動詞形は次のような分布を示している。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal
<i>till</i>	8	5	0	1 ( <i>shall</i> 1)

非過去では、直説法と断定できる例はない。法助動詞の *shall* を用いた1例を挙げておこう。

(58) Verely I saye unto you, some there be amonge them that here stonde, whych shall nott taste of deeth, tyll they *shall* have sene the sonne of man come in hys kyngdome. (Matt 16)

この例では、*whych* 以下の関係節は *shall* を用いて未来に言及する陳述であり、*till*-節内でも *shall* が用いられている。ところが、上の(54)に示した例 “I tell you for a treuth [= truth], ye shal not fynysse all the cities of israhel, tyll the sonne of man *be* come.” では、同じく *shall* を用いて未来時に言及し、意味的にも似た文であるが、*till*-節内では接続法現在形が用いられている。未来に言及する例は全部で8例あるが、*shall* を用いたものは(58)の1例のみであった。*before*-節の場合と同様、非過去の環境の *till*-節でも接続法現在形が普通であったと言えよう。

最後に *whosoever*-節について見ておきたい。*whosoever*-節は名詞節とも副詞節とも解しうる例もあるが、ここではまとめて副詞節として扱う。

*whosoever*-節は総計で45例あり、その中で接続法現在形の例は5例のみであった。45例中の述語動詞の内訳を下に示す。なお、45例すべてが非過去の環境に生起する例であった。

	Sbj	Sbj/Ind	Ind	Modal	
whosoever	5	0	25	15	(shall 11, will 4)

whosoever-節では、意志あるいは未来時に言及する場合には will か shall を用い、現在時に言及する場合には直説法現在形を用いるのが普通である。接続法現在形が用いられた例は、直接法現在形が用いられた例と同じ文脈に現れており、両者の間に特に意味上の違いはないと思われる。接続法現在形が用いられた例として上の (55) に挙げた “whosoever *swear* by the temple, yt ys nothings: but whosoever *swear* by the golde of the temple, he is detter” のすぐあとに、同じ文脈で “and whosoever *swear*th by the aulter [= altar] it is nothings: but whosoever *swear*th by the offeringe that lyeth on the aulter ys detter.” (Matt. 23) という同種の内容の文が続くが、ここでは whosoever のあとで直説法現在形 (swearth) が用いられている。

#### 4. 結び

以上、小論では、1526年刊の Tyndale 訳の「マタイによる福音書」を資料として、初期近代英語の最初期における接続法の用法について考察した。当然ながら、現代英語における状況とは様々な点で異なる。例えば、if-節の中で接続法現在形を用いることは現代英語では稀であるが、Tyndale 訳では普通であった。しかし、Tyndale 訳でも、目的を表す that-節では接続法現在形を用いることは少なく、現代英語の so that-節の場合のように、法助動詞を用いることが普通であった。

英語史の流れの中で接続法の衰退について論ずる際には、統語的環境ごとに、あるいは意味的環境ごとに、また、場合によっては語ごとに、接続法の用法の実態について細かく観察することが必要である。例えば、現代英語の *lest*-節内での動詞形について論じた Urata (2005) でも示したように、同じく否定目的を表す接続詞であっても、*lest*-節と *for fear that*-節とでは、節内の動詞形 (接続法、直説法、法助動詞) の現れ方に大きな違いが見られる。このように、個々の語に特有の性格が、節内の法性に影響を及ぼす場合もあるだろう。

今後は、小論で行った調査を踏まえて、Tyndale 訳新約聖書 (1526) における調査を深め、初期近代英語の最初期における接続法の用法を明らかにし、前後の時代の英訳聖書と比較しながら、通時的に精緻にとらえたいと考えている。

#### 参考文献

##### <一次資料>

*The New Testament 1526 Translated by William Tyndale.* Ed. by W. R. Cooper. London: The British Library, 2000.

*The Holy Bible: An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611 with an Introduction by Alfred W. Pollard.* Oxford University Press,

Oxford & Kenkyusha, Tokyo, 1985.

*The Bible in English*. Cambridge: Chadwyck-Healey, 1996. [CD-ROM 版]

*Die Luther-Bibel von 1534*. Vollständiger Nachdruck (Complete facsimile edition). Köln: Taschen, 2003.

### <二次資料>

Barber, Charles. 1997. *Early Modern English*. 2nd ed. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Daniell, David. 1994. *William Tyndale: A Biography*. New Haven: Yale University Press.

Dons, Ute. 2004. *Descriptive Adequacy of Early Modern English Grammars*. Berlin: Mouton de Gruyter.

González-Álvarez, Dolores. 2003. “*If he come vs. If he comes, if he shall come: Some Remarks on the Subjunctive in Conditional Protases in Early and Late Modern English*”. *Neuphilologische Mitteilungen*, vol. 104, pp. 303-313.

Harsh, Wayne. 1968. *The Subjunctive in English*. Alabama: University of Alabama Press.

Jespersen, Otto. 1949. *Modern English Grammar on Historical Principles*. Part 7. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.

Mustanoja, T. F. 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophilologique.

Övergaard, G. 1995. *The Mandative Subjunctive in American and British English in the 20th Century*. Uppsala: Uppsala University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Rissanen, Matti. 1999. “Syntax”. In *The Cambridge History of the English Language Vol III: 1476-1776* ed. by Roger Lass (Cambridge: Cambridge University Press, 1999).

Urata, Kazuyuki. 2005. “Verb Forms in the *Lest*-Clause in Present-Day English”. In *Corpus-Based Approaches to Sentence Structures* ed. by Toshiro Takagaki, Susumu Zaima, Yoichiro Tsuruga, Francisco Mareno-Fernández and Yuji Kawaguchi. (Amsterdam: John Benjamins, 2005).

Visser, F. Th. 1966. *An Historical Syntax of the English Language*. Part 2. Leiden: E. J. Brill.

苅部恒徳・笹川壽昭・小山良一・田中芳晴 2002 『徹底解明 欽定英訳聖書初版 マタイ福音書一解説・原文・註解・文法一』 研究社

工藤康弘・藤代幸一 1992 『初期新高ドイツ語』 大学書林

高橋輝和 1994 『古期ドイツ語文法』 大学書林

寺澤芳雄・早乙女忠・船戸英夫・都留信夫 1969 『英語の聖書』 富山房